

仙台市文化財調査報告書第169集

宮城県仙台市

郡山遺跡XIII

— 平成4年度発掘調査概報 —



1993.3

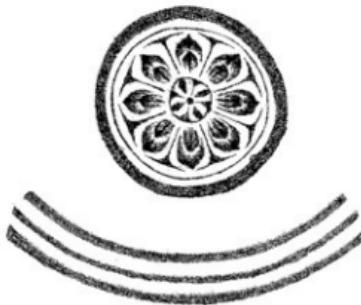
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第169集

宮城県仙台市

郡山遺跡XIII

— 平成4年度発掘調査概報 —



1993.3

仙台市教育委員会

序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は13年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じておりますことは、古代史・考古学等の識者のみならず、市民の皆様方に御承知のことと存じます。

幻の城柵としての一環を現した昭和54年以来、継続的に進められてきた発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙跡・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度の調査ではⅠ期官衙の木材列（塀跡）などが発見され、Ⅰ期官衙の様相が次第に解明されつつあります。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にありますが、そのような中にあって、継続的な調査を実施できることは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くの御協力と御支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深い御理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成5年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例 言

1. 本書は郡山遺跡の平成4年度範囲確認調査の概報である。
2. 本調査は国庫補助事業である。
3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 木村浩二 III

長島栄一 I、II、IV~VI

遺構トレース 増田瑞枝、菅井百合子、日比野潤子

遺物実測 稲葉俊一、小佐野章子、菅家婦美子、吉田りつ子

遺物トレース 増田、菅井、日比野

遺構写真撮影 木村、稲葉、長島

遺物写真撮影 稲葉

遺物補修復元 赤井沢千代子、洞口れい子

図版作成 永田英明

編集は長島・稲葉・永田がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点(X=0、Y=0)とし、高さは標高値で記した。
5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。
6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A	柱列跡他跡	S E	井 戸 跡	S X	その他の遺構
S B	建 物 跡	S I	竪穴住居跡・竪穴遺構	P	ピット・小柱穴
S D	溝 跡	S K	土 坑		

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A	縄 文 土 器	D	土師器(ロクロ使用)	G	平瓦・軒平瓦
B	弥 生 土 器	E	須 恵 器	H	その他の瓦
C	土師器(ロクロ不使用)	F	丸瓦・軒丸瓦	N	金 属 製 品

8. 遺物実測図の中心線は、個体の残存率がほぼ50%以上は実線、ほぼ25~50%で一点鎖線、これ以下は破線とし、網スクリートーン貼り込みは黒色処理を示している。
9. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐藤:1970)を使用した。

目 次

序 文	
例 旨	
Iはじめに	1
II調査計画と実績	2
III第95次発掘調査	4
1. 調査 経 過	4
2. 発見遺構・出土遺物	4
IV第96次発掘調査	6
1. 調査 経 過	6
2. 発見遺構・出土遺物	8
3. ま と め	24
V第97次発掘調査	28
1. 調査 経 過	28
2. 発見遺構・出土遺物	28
VI総 括	29
調査成果の普及と関連活動	35
写 真 図 版	37

I はじめに

平成4年度は郡山遺跡範囲確認調査第3次5ヶ年計画の3年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

文化財課 課長 白鳥良一

管理係 係長 菅原澄雄

主任 村上道子

主事 佐藤正幸

調査係 係長 加藤正範

主任 木村浩二

主事 長島榮一

教諭 稲葉俊一

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北工業大学教授 建築史）

副委員長 工藤雅樹（福島大学教授 考古学）

委員 岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授 考古学）

千葉景一（宮城県多賀城跡調査研究所所長兼東北歴史資料館副館長 歴史学）

須藤 隆（東北大文学部教授 考古学）

今泉隆雄（東北大文学部助教授 歴史学）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々の御協力をいただいた。記して感謝したい。

地権者 赤井沢久治、菅原一雄、菅原一幸

調査参加者 赤井沢きすい、赤井沢サダ子、赤井沢千代子、伊勢多賀子、伊勢みつ、伊藤貞子、伊東弘子、大友節子、大友鶴雄、小佐野章子、小鳩登喜子、小沼佳代子、菅家婦美子、工藤ゑなよ、小池房子、小林テル、佐々木直子、佐藤栄子、菅井百合子、高橋ヨシ子、千田あや子、永田英明、日比野園子、洞口れい子、牧かね子、吉田りつ子

II 調査計画と実績

平成4年度の発掘調査は平成2年度から始められた「郡山遺跡範囲確認調査」第3次5ヶ年計画案にもとづく第3年次めである。計画案によれば今年度はII期官衙南東部の調査予定であったが、仙台市が推める再開発事業との関連からI期官衙の南西部の調査へと変更したものである。これについては平成3年度の調査指導委員会で諒承を得ている。発掘調査費については国庫補助金額の内示（総経費1,700万円、国庫補助金額850万円、県費補助金額425万円）を得たことから、次のような実施計画（案）を立案した。

表1 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定期積	調査予定期間
第96次	I期官衙南西地区	700m ²	9月～11月
計	1 地区	700m ²	9月～11月

また、この他に関連遺跡の遺構確認調査として、郡山遺跡の隣接地である長町貨物ヤード跡地における遺跡範囲確認調査、仙台市内の農村基盤総合整備事業にかかる発掘調査報告書の作成についても併せて立案している。

事業開始にあたり郡山遺跡内で緊急に調査を行う必要が生じ、第94次、第95次、第97次までの発掘調査を実施した。そのうち第94次調査は宅地造成に伴う事前調査であるため、本報告書では調査位置を明示するに留める。調査報告書も発掘調査概報とは別に平成5年度刊行予定である。

第95次調査は個人住宅の建て替えに伴うものであるが、方四町II期官衙の北辺上であるため調査面積は狭小であるが実施した。第97次調査は既存の市道にU字側溝を埋没する工事に伴う調査で、工事と併行して実施した。ただし工事の計画段階から、方四町II期官衙外郭南辺を南北に縦断することが判明していたため、材木列の部分のみ基礎構造の変更を協議し遺構の保存をはかっている。よって今年度は以下のよう内容で発掘調査を実施した。

表2 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第95次	II期官衙外郭北辺地区	12m ²	7月25日～7月29日
第96次	I期官衙南西地区	540m ²	10月12日～12月18日
第97次	II期官衙外郭南辺地区	114m ²	10月15日～10月30日
計	3 地区	666m ²	7月25日～12月18日



第1図 郡山遺跡全体図

III 第95次発掘調査

1. 調査経過

第95次調査は、仙台市太白区郡山2丁目3-5伊藤仁郎氏より同2丁目14-18において、専用住宅新築に伴う発掘届が平成4年4月17日付で提出された。よって平成4年5月25日から28日まで、敷地内の発掘調査を実施した。

調査対象地区は、方四町II期官衙の外郭北辺にあたり、外郭材木列と大溝位置が敷地にかかっている。対象となる敷地は、すでに宅地として使用されており、かなりの盛土が成されているものと推定された。建築される建物の基礎掘削深度は盛土内に納まることが確認されたことから、調査は建築部分をさけ、敷地東側に長さ6m、幅2mの調査区を南北に設定した。表土・盛土およびII層の旧水田耕作土は重機で排土し、V層で遺構検出作業を行った。

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査により発見された遺構は溝跡1条のみである。

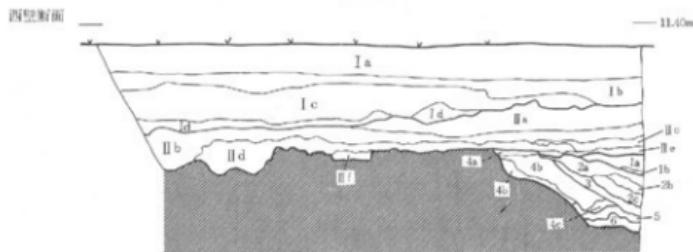
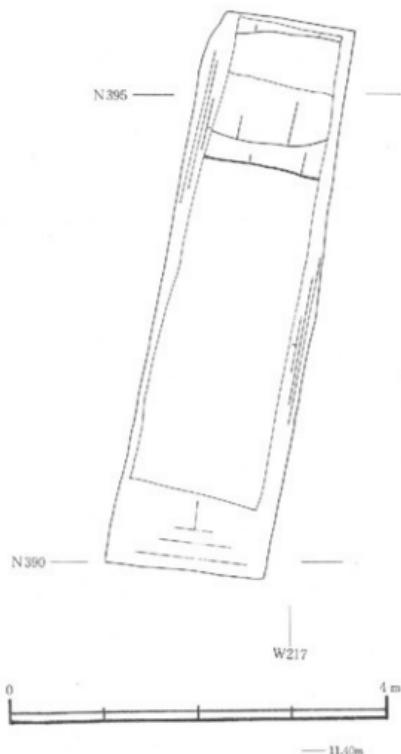
S D617溝跡 上幅160cm以上、下幅55cm以上、深さ80cmで、東西方向に続く溝跡の南側立ち上がりだけを検出した。検出部分はわずかに2mのみで、詳細は不明であるが、方向はほぼ真東西方向である。堆積土は大別して6層に分けられるが、主体は褐色ないしはにぶい黄褐色のシルトおよび粘土質シルトで、同色の砂や粘土が間層として入り、自然堆積層とみられる。南壁立ち上がりは底面より50cm程でわずかに段がつくが、断面形は逆台形を呈するものとみられる。旧表土は削平のため、本来の溝幅・深さは不明である。4層中から土師器甕片1点と動物の歯4本が出土している。

検出位置や規模からみて、II期官衙外郭の北辺大溝と考えられる。



第2図 第95次調査区位置図

調査	土 色	主 性	備 考
I a	赤褐色	粘 土	腐土
I b	赤褐色	粘 土	腐土
I c		砂	腐土
I d		砂と粘土	腐土
II a	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	水田の開墾土
II b	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	水田の耕作土
II c	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	水田の耕作土 一部グライ化
II d	5 Y2/2 オリーブ黒色	粘土質シルト	グラス化
II e	2.5Y4/3 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	一部グライ化
II f	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	グライ化
S D67			
1 a	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	
1 b	10YR4/4 塗色	粘土質シルト	
2 a	10YR4/4 塗色	粘土質シルト	黄褐色シルト・粘土を含む
2 b	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	
2 c	10YR4/4 塗色	砂	
3	10YR5/4 に近い黄褐色	粘 土	下層に酸化鉄多量
4 a	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	
4 b	10YR4/4 塗色	粘土質シルト	
4 c	10YR4/4 塗色	砂	
4 d	10YR4/4 灰色	粘土質シルト	
5	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト質粘土	
6	10YR5/2 灰黃褐色	粘 土	酸化鉄多量



第3図 第95次調査区平、断面図

IV 第96次発掘調査

1. 調査経過

第96次調査区は方四町II期官衙外の南西に70m程離れた地区に位置している。この周辺では本格的な発掘調査は実施されておらず、どのような遺構が分布しているか明らかになっていない地区である。ただしこの規模な調査ながら昭和57年（1982）に実施された第28次調査では、E-28°-S方向のS A272材木列が検出され、I期官衙の遺構が確認されている。同年の第27次調査ではII期官衙の外側に位置しながら、円面鏡がピット中より出土するなどしてこの地区にも官衙の遺構が残がっていると考えられた。しかし昭和61年～63年にかけて実施した、諏訪神社北方の第66次、第70次、第76次調査などでは、I期官衙に関連する遺構が発見されていないことから、第28次調査でのS A272材木列の存在と併せて、I期官衙の南限が今次調査区周辺に求められるのではと想定した次第である。

現況は標高9m程の畠地で、10月12日より土層を観察するための試掘を行い調査区（A・B区）を設定し、10月14日より重機による耕作土の排土作業を行った。10月16日より遺構の検出作業に入ったが、調査予定地内のほぼ全面に渡り天地返しによる搅乱が及んでおり、その掘り上げ後に遺構の検出をせざるを得なかった。搅乱による深度が一定でないため、遺構の検出はII層～IV層上面に渡り、遺構の削平が著しいと考えられた。A、B区の遺構の検出状況に応じ、C、D区を設定し調査区を拡げた。遺構の全容が確認された11月19日、さらにD区の南を拡張し、調査面積は540m²となった。調査の成果をもって12月3日報道発表、5日に現地説明会を実施し、12月14日から埋め戻し作業を行い、12月18日全ての作業を終了した。



第4図 第96次調査区位置図

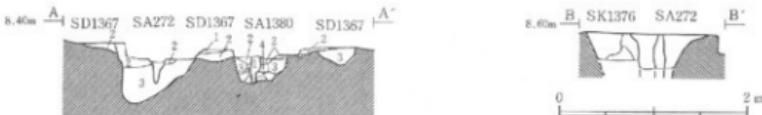


第5圖 第96次調査区断面図

2. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、材木列5条、掘立柱建物跡5棟、土坑3基、溝跡6条、小柱穴・ピットなどである。これらの遺構は表土（I層）直下に波状の凹凸があるため、基本層位II～IV層上面に渡って検出されている。

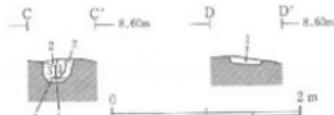
S A272材木列 東西に延びる材木列で、方向はE-27°-Sである。検出した長さは41m、布掘りの上幅が40～120cm、深さは残存状況の良好な箇所で検出した面より55cmである。布掘り底面に標高差があり、浅い箇所では搅乱により途切れている。布掘りのほぼ中央に直径10～20cmの柱痕跡が見られる。埋土は暗褐色粘土、粘土質シルト、黒褐色粘土などで、須恵器E-350壺片（第23図3）と少量の土師器壺片が出土している。形状や位置関係から第28次調査で検出した材木列の延長と考えられる。



A-A'			
層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 嫩 黄 色	粘土質シルト	柱痕跡
2	10YR3/4 嫩 黄 色	粘 土	
3	10YR2/3 黒 暗 色	粘 土	
SA272			
1	10YR3/3 嫩 黄 色	粘 土	柱痕跡
2	10YR3/4 嫩 黄 色	粘土質シルト	
3	10YR5/3 に近い 黄褐色	シルト	
SA1380			
1	10YR3/3 嫩 黄 色	粘 土	柱痕跡
2	10YR3/4 嫩 黄 色	粘土質シルト	
3	10YR5/3 に近い 黄褐色	シルト	
4	10YR3/3 嫩 黄 色	粘土質シルト	
5	10YR6/3 に近い 黄褐色		
SD1367			
1	10YR3/4 嫩 黄 色	粘 土	柱痕跡
2	10YR3/4 嫩 黄 色	粘 土	柱痕跡
3	10YR4/4 嫩 黄 色	シルト質粘土	

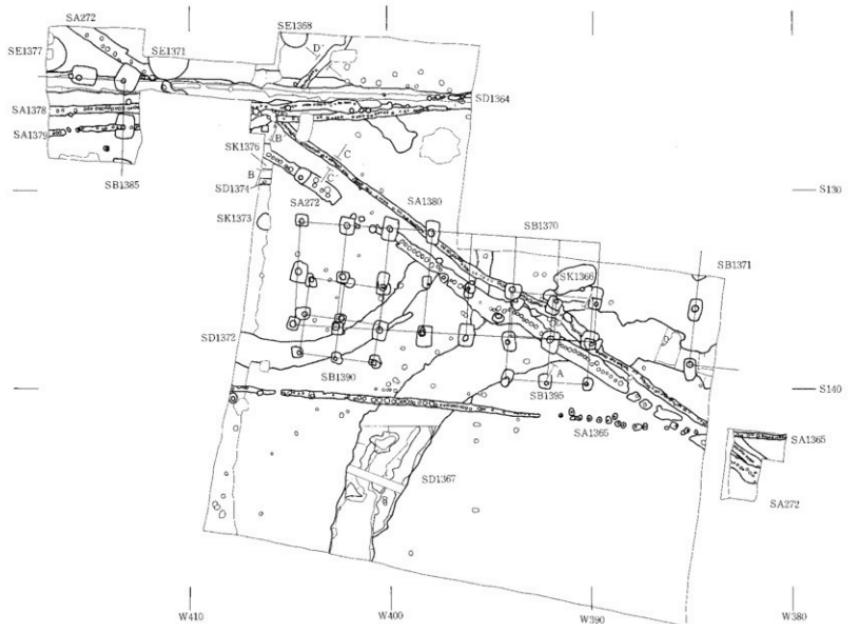
第6図 S A272・S A1380材木列・S D1367溝跡・S K1376土坑断面図

S A1380材木列 調査区の東から西へ延び、東端より30mの地点でL字に曲がり北へ延びる材木列である。方向は東西に延びる部分でE-29°-S、南北に延びる部分でN-35°-Eである。検出した長さは東西30m、南北5.5mで、布掘りの上幅は20～70cm、深さは残存状況の良好な箇所で検出した面より35cmである。布掘りの中を多少蛇行するよう直径5～12cmの柱痕跡が見られる。またL字に屈曲するコーナー部分に直径11～22cm程の縫が2個埋設されている。埋土は暗褐色粘土、粘土質シルトなどで、土師器壺、壺片が少量出土している。

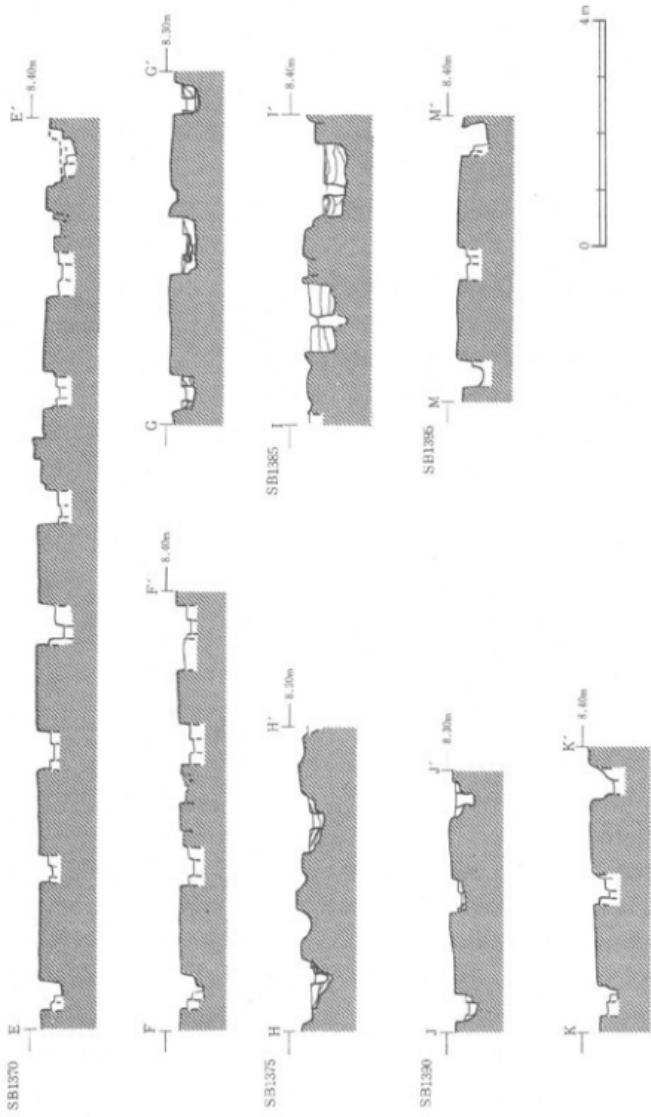


C-C'			
層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 嫩 黄 色	粘土質シルト	柱痕跡
2	10YR4/2 变黄褐色	粘土質シルト	
3	10YR3/4 嫩 黄 色	粘土質シルト	
4	10YR4/4 嫩 黄 色	シルト質粘土	
5	10YR5/6 黄 色	シルト質粘土	
D-D'			
層位	土色	土性	備考
1	10YR3/4 嫩 黄 色	粘 土	

第7図 S A1380材木列断面図



第8図 第96次調査区造構配図 (1/200)



第9図 振立柱建物断面図

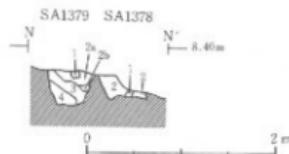
S A 1378材木列 東西に延びる材木列で、方向はE-9°-Nである。検出した長さは21m、布掘りの上幅が30~70cm、深さは30~40cmで、布掘りの中央に直径5~15cmの柱痕跡が見られる。埋土は黒褐色粘土、シルト、暗褐色粘土などで、土師器片が1点出土している。S A 272、S A 1379材木列を切り、S D 1364溝跡に切られている。

S A1379材木列 東西に延びる材木列で、方向はE-10°-Nである。検出した長さは20m、布掘りの上幅が20~50cm、深さは残存状況の良好な箇所で検出した面より26~35cmで、一部で浅くなり途切れている。布掘りの中央に直径5~15cmの柱痕跡が見られる。埋土師器片が2点と弥生土器B-262鉢(第23図1)が出土物跡を切り、S A1378材木列、SD1364溝跡に切られ

S A 1365材木列 東西に延びる材木列で、方向はE-2°-Nである。検出した長さは27.6m、布掘りの上幅が15~35cm、深さは残存状況の良好な箇所で検出した面より45~50cmで、一部で浅くなり途切れている。布掘りの中央に直径5~25cmの柱痕跡が見られる。埋土は暗褐色、黒褐色粘土質シルトなどで、土師器坏、甕片、須恵器甕片が少量出土している。

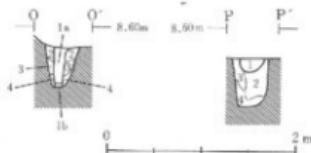
D1381溝跡に切られている

S B 1385建物跡 東西1間以上、総長4m以上(柱間寸法230cm)、南北2間以上、総長4.1m以上(柱間寸法230cm)の建物跡で、方向は東柱列でN-5°-W、北柱列でE-4°-Nである。柱穴は90~110cm×が25~30cmである。北1東1柱穴の深さは74cmで、褐色粘土などである。各柱穴より土師器、須恵器片がS A1379材木列、S D1364溝跡に切られている。



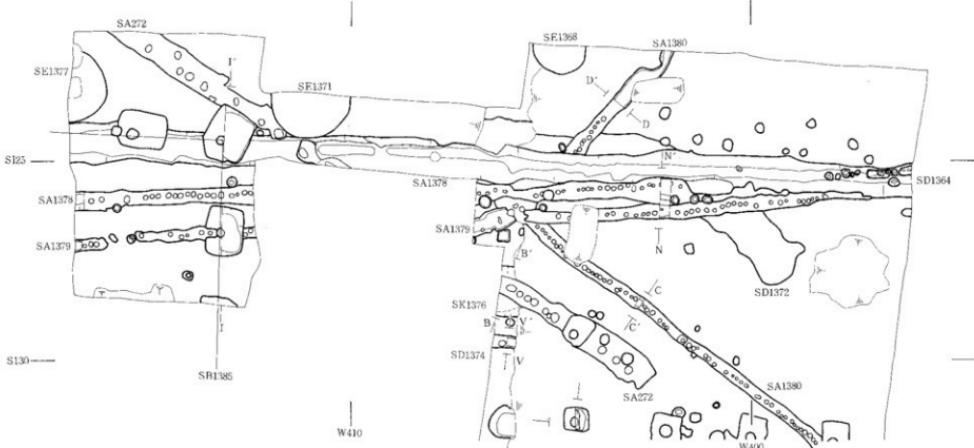
N-N'	A-1378	標高	土 壙	性 質	類 別
1	10YR 3/2 黑 棕 色	砂 土	柱狀結		
2	10YR 3/2/3 黑 棕 色	粉 土	白色黏土を含む		
3	10YR 3/2 黑 棕 色	黏土質シルト	柱狀結		
2*	10YR 4/2 黃 棕 色	砂 土	柱狀結		
2 b	10Y 5/3 在に黄 棕 色	粉 土	柱狀結シルト		
3	10Y 5/3 黑 棕 色	粉 土	柱狀結多量		
4	10Y 5/2 黑 在に黄 棕 色	粉 土	柱狀結多量		

第10図 SA1379・SA1378断面図



層位	上	色	土 性	備 考
1-a	10YR 3/5	褐	褐色	粘土質シルト
1-b	10YR 4/2	褐	褐色	シルト質粘土 柱状層
2	10YR 5/3	褐	褐色	褐色粘土を含む
3	10YR 5/7	黑	黑色	粘土質シルト
4	10YR 5/7	灰褐色	シルト質粘土	微化鉄

第11圖 SA136E材木列斷面圖



第12図 第96次調査区北半平面図 (1/100)

S B 1370建物跡 桁行7間、総長15m(柱間寸法220cm)、梁行2間、総長5.2m(柱間寸法260cm)の東西棟の建物跡で、方向は梁行(西柱列)でN-2°-W、桁行(南柱列)でE-3°-Nである。柱穴は50~80cm×60~110cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径が15~30cmである。ただし内部の柱は柱穴や柱痕跡とも小規模なものが多く、柱筋も梁列ではほぼ揃っているものの桁列では不揃いなものが多いことから、床東柱と考えられる。梁行で柱穴の深さは30~50cm、埋土は黒褐色、暗褐色シルト質粘土などである。南1東5柱穴にのみ柱の抜き取り穴が検出されている。南1東8柱穴より土師器壺片が2点、南1東5柱穴より内面黒色処理された土師器壺片が1点と須恵器E-358甕体部片(第23図4)が出土している。S D1367、S D1372溝跡、S A272、S A1380木材列、S B1390、S B1395建物跡を切り、S D1381溝跡に切られている。

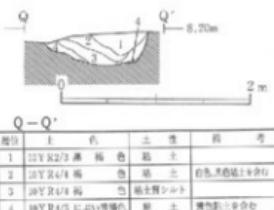
S B 1375建物跡 南北1間以上、総長2.8m以上(柱間寸法280cm)で、建物跡の南西隅と考えられ、方向はN-0°-E(真北方向)である。柱穴は50~60cm×110cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径が28~40cmである。柱穴の深さは40~50cmで、埋土はにぶい黄褐色、褐灰色粘土などである。南2柱穴より土師器甕片が1点出土している。S D1367溝跡を切っている。調査区北壁際に柱穴状の落ち込みが検出されているが、柱間の間隔から別遺構と考えられる。

S B 1390建物跡 東西2間、総長3.8m(柱間寸法185~190cm)、南北2間、総長3.8m(柱間寸法180~195cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN-3°-E、南柱列でE-2°-Sである。柱穴は50~60cm×50~75cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径が20~30cmである。西柱列で柱穴の深さは30~40cmで、埋土は暗褐色粘土、粘土質シルト、黄褐色シルト質粘土などである。南1東1、南1東2、南3東3柱穴に柱の抜き取り穴が検出されている。S D1372溝跡を切り、S B1370建物跡に切られている。

S B 1395建物跡 東西2間、総長4m(柱間寸法200cm)、南北2間、総長4.4m(柱間寸法210~220cm)の総柱建物跡で、方向は西柱列でN-3°-W、南柱列でE-2°-Nである。柱穴は50~90cm×50~80cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径20~25cmである。南1東1柱穴の深さは50cmで、埋土は褐色、赤褐色粘土などである。南1東1~東3、南2東1柱穴に柱の抜き取り穴が検出されている。S D1367、S D1369溝跡、S A1380木材列を切り、S B1370建物跡に切られている。なお調査区の制約から南北柱列の規模について、2間以上になる可能性もある。

S K 1366土坑 長軸230cm、短軸120cmの不整楕円形で、深さ35cm、底面ほぼ平坦である。壁は南側が緩やかに立ち上がるが、北側は垂直に立ち上がる。堆積土は黒褐色、褐色粘土などである。S D1369溝跡ピットを切っている。

S K 1373土坑 南北80cm、東西60cm以上の楕円形と推



第13図 S K 1366土坑断面図

定され、深さは30cm、底面はやや凹凸がある。壁は南側が垂直に立ち上がるが、北側は緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色、褐色粘土などである。東側を攪乱により削平されている。

S K 1376土坑 南北60cm以上、東西60cm以上で平面形は不明である。深さは30cm以上で、壁は緩やかではあるが直線的に立ち上がっている。堆積土は暗褐色粘土などである（第6図参照）。S A 272材木列に切られ、東側を攪乱により削平されている。

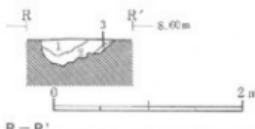
S E 1368井戸跡 直径130cmの円形で、深さは60cm以上である。埋土は灰白色粘土である（第5図参照）。

S E 1371井戸跡 直径200cmの円形で、深さは50cm以上である。埋土は褐灰色粘土質シルトである。S D 1364溝跡、S A 272材木列を切っている。

S E 1377井戸跡 直径180cmの円形で、深さは20cm以上である。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

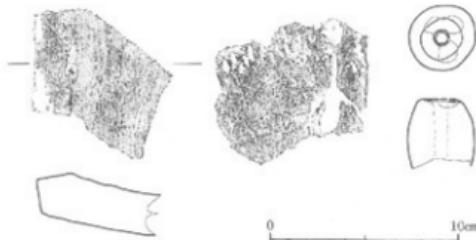
S D 1364溝跡 総長21m以上で東西に延びる溝跡である。上幅90~170cm、下幅10~70cm、深さ15~50cm、底面は多少凹凸があり、断面形はU字形で、壁は緩やかに立ち上がる。方向はE - 4° - Nである。堆積土はにぶい黄褐色、褐色粘土質シルトなどで（第5図）、土師器C-716壺、平瓦G-64、P-25土鉢（第15図1、2）の他に土師器壺、壺片、須恵器壺、壺片が出土している。S D 1372溝跡、S A 272、S A 1380材木列、S B 1385溝跡を切り、S E 1371井戸跡に切られている。

S D 1367溝跡 上幅110~350cm、下幅30~200cm、深さ20~130cm、断面形は逆台形で底面と壁の一部に凹凸がある。底面から上部へ緩い傾斜で立ち上るため、攪乱による削平が著しい。形状より溝の外側で直径30mの円形に巡る溝跡と推定される。堆積土は5層に大別され、第1層～第2層は褐色、灰黄褐色のシルト、シルト質粘土を主体とし、第3層は黒褐色シルト質粘土などである。第4～第5層は暗褐色シルト質粘土、黒褐色粘土質シルトなどである。第1層



層位	土 色	土 性	備 考
1	UV R2/3 黄褐色	粘 土	
2	UV R4/4 褐 色	粘 土	炭化物少量
3	UV R4/4 褐 色	粘土質シルト	

第14図 S K 1373土坑断面図

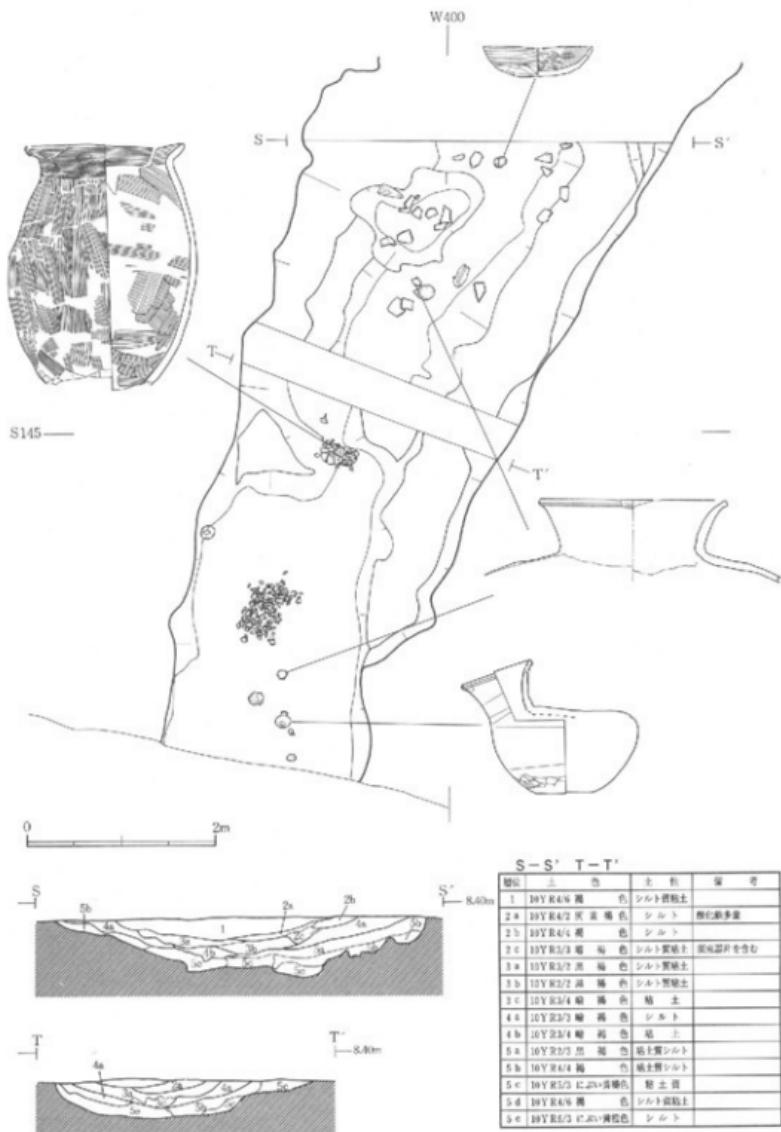


回復 番号	登 録 番 号	種 別	出 土 地 点			外 壁 製 造	内 壁 製 造	写 真 図 版
			地 区	道	橋			
1	G64	平 瓦	B区	S D 1364		横背板	ナワヨネ	
2	P25	+	路	B区	S D 1364	布目	ナフ	

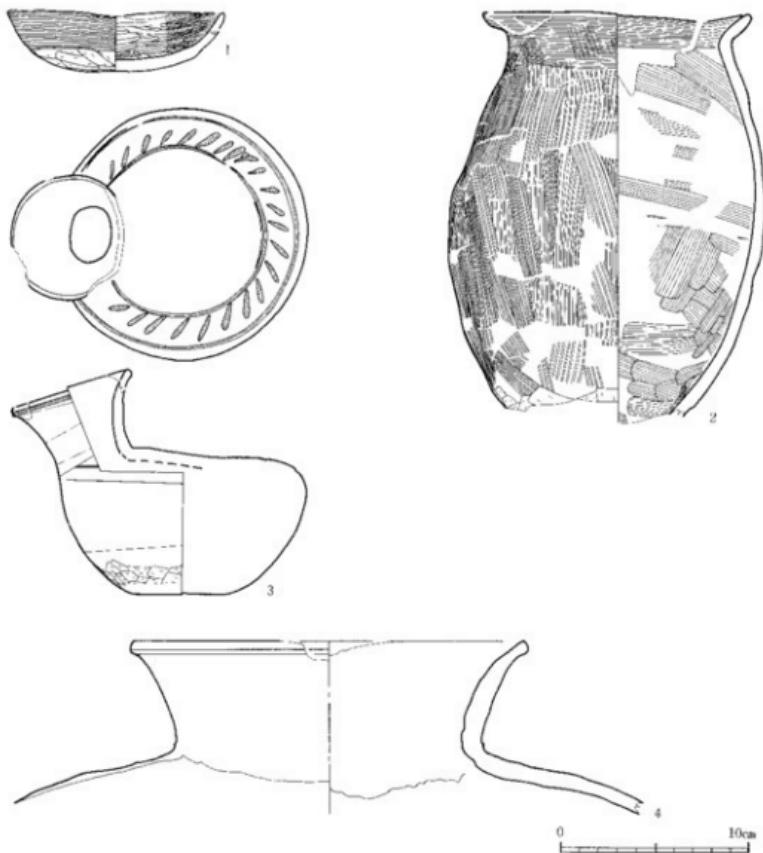
第15図 S D 1364溝跡出土遺物



第16図 第96次調査区南半平面図 (1/100)

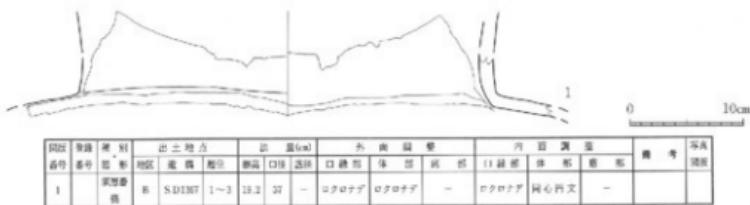


第17図 S D 1367溝跡遺物出土状況平面図・断面図



出類 番 号	遺 物 名	種 類	地 区	井上地點			底 面 形	外 面 形			内 面 形			備 考	下 巻 回 数	
				遺 物 名	層 位	性 質		口 徑	底 径	体 部	底 部	内 面 形	外 面 形	底 部		
1 C712	土器	片	B	SD1367	1	3.3	11.6	8.9	ヨコナデ	—	ヘラケヅリ	ハクミガキ	ヘクミガキ		16-4	
2 C718	土器	片	B	SD1367	1	21.8	14.3	—	ヨコナデ	ハテメ	ハラケヅリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	16-1	
3 E361	土器	片瓦	B	SD1367	5#	12	6.4	5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケヅリ	ロクロナデ	—	—	外観に剥離感 あり	17-1
4 E364	土器	片	B	SD1367	1	9.2	20.7	—	ロクロナデ	タタキ	ロクロナデ	同心円文	—	—		

第18図 S D1367溝跡出土遺物（1）



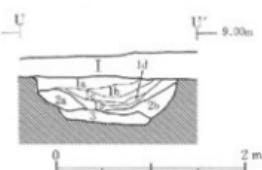
第19図 S D1367溝跡出土遺物（2）

～第2層には層中に基本層位第III層に類似する白色の粘土ブロックが多量に含まれ、同一個体の遺物が層中に散らばって出土していることから、人為的埋め戻された可能性がある。第3層については単一の土が堆積している。また第4層～第5層については、第1層～第2層と同様に基本層位に類似した土をブロック状に含んでいる。

遺物は第1層から第3層上面までまとまって出土している。土師器C-717壺（第18図1）は内面黒色処理された丸底の壺で、外面に緩い段があり口縁部にかけてやや丸味を持ちながら外傾して立ち上がっている。土師器C-718甕（第18図2）は口縁部が「く」の字状に外反し、口縁部から胴部にかけて明瞭な段を有さず、胴部中央が僅かに膨るものである。また土師器C-719甕は器面の磨滅が著しく、全体の器形を復元するに到らなかった。須恵器E-354甕（第18図4）は口縁端部が平坦で、頸部に文様等が施されないものである。須恵器E-357甕（第19図1）は推定口径が37cm以上になる大形の甕の頸部片である。その他に第1層から第2層中にかけて外面格子叩きで内面が同心円文の当具痕のある須恵器E-359、360甕片が出土している。また調査区南壁ぎわの最下層からは、天井部に沈線で区画された中に櫛状工具による刺突が巡る須恵器E-361平瓶（第18図3）と須恵器E-351甕底部片が出土している。

S D1369溝跡 総長2.5mで東西に延びる溝跡である。上幅50～80cm、方向はE-6-Nである。遺構の検出のみに留めている（第16図参照）。

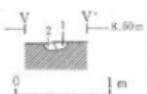
S D1372溝跡 上幅100～160cm、下幅83cm、深さ45cmで、底面は平坦である。断面形はU字形で、壁は下半が緩やかに立ち上がるが上半は直立気味である。形状より溝の外側で直径15mの円形に巡る溝跡と推定される。堆積土は3層に大別され、第1層～第2層は黒褐色シルト、シルト質粘土、暗褐色シルト質粘土などで、第3層のみ灰白色のジルト質粘土である。



部位	土 色	性 質	備 考
1	10YR3/4 E-357 黄褐色	シルト	耕作土
S D1372			
1 a	10YR3/2 黑 色	シルト	
1 b	10YR3/3 黑 棕 色	シルト質粘土	
1 c	10YR2/2 黑 色	シルト質粘土	
1 d	10YR6/4 にぶい 黄褐色	シルト質粘土	
1 e	10YR3/3 黑 色	シルト質粘土	
2 a	10YR3/4 黑 色	シルト質粘土	
2 b	10YR4/5 黑 色	シルト質粘土	
3	10YR8/1 黑 白	シルト質粘土	

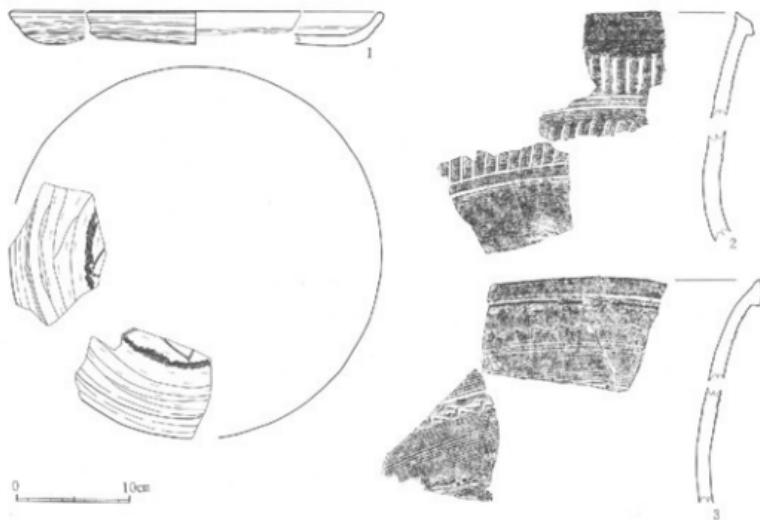
第20図 S D1372 溝跡断面図

S D 1374溝跡 調査区西端で0.57mの
み検出した東西に延びる溝跡である。上
幅30~40cm、下幅20cm、深さ7cm、底面



は平坦であり断面形は逆台形である。方
向はE-7°-Nで、堆積土は褐色粘土質シルトである。東側が搅乱により削平されているが、
さらに東に延びていた可能性があることと、調査区の西壁際で直径15cmのピットが溝の上面で
重複していることなどから、掘り方の浅い材木列の可能性もある。

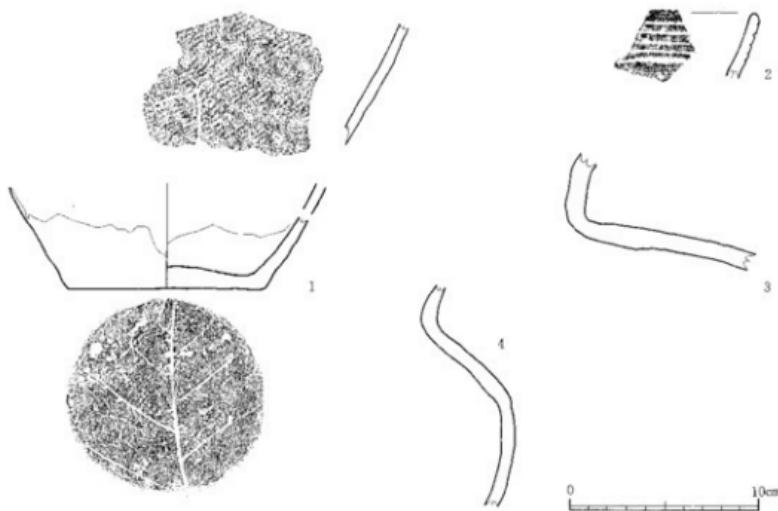
S D 1381溝跡 総長8mで南北に延びる溝跡である。上幅65~80cm、下幅22~42cm、深さ
10~30cm、底面は平坦である。断面形はU字形で壁は緩やかに立ち上がっている。方向はN-
1°-Eである。南半ほど搅乱による削平が著しい。S D 1367溝跡、S A 272、S A 1380材木列、
S B 1370建物跡を切っている。



第21図 S D 1374溝跡断面図

回数 番号	種類	測定区	出土地點	層位	高さ(cm)	外観面			内観面			性考	写真 図版
						表面	口縁	底	口縁部	底部	内面		
1 E349	骨	B+C	カクラン	-	5 32.5 30.4	ロクロナデ	-	-	ヘラクオリ 板状文	ロクロナデ	-	同心円文	17-2
2 E355	骨	A+B	カクラン	-	18.3 - -	ロクロナデ 板状	-	-	ロクロナデ	-	-	-	
3 E356	骨	D	カクラン	-	18.7 - -	ロクロナデ 板状文	-	-	ロクロナデ	-	-	-	

第22図 第96次調査区出土遺物(1)



図版 番号	種類 名	種別	形	部位	出土地點			外面調査	内部調査	備考	写真版
					地区	道	橋				
1	B-261	弥生土器	深鉢	胸部 ～底部	A		W	L R縦文	ミガキ	表面が美しい	16-2
2	B-262	弥生土器	浅鉢	口縁部	B	S A	1329	I	沈線	ミガキ	
3	E-359	須恵器	盤	腹部 ～体部	C	S A	272	I	緑色の釉	同心円文 →クロナデ	
4	E-358	須恵器	盤	底部 ～体部	B	S R	1329		ロクロナデ	ロクロナデ	
							S 1 W 4				

第23図 第96次調査区出土遺物（2）

この他に小柱穴2、ビット88が検出されている。また遺構に伴わない遺物としては、遺構検出面を溝状に削平した天地返しの攪乱中より、須恵器E-348盤（第22図1）、須恵器E-355、350盤（第22図2、3）が出土している。このうち須恵器E-348盤は底部に文字か文様かは明らかでないが線刻があり、波状沈線も施されている。内面には同心円文状の当具痕が観察される。基本層位第IV層中よりかなり磨滅しているが、弥生土器B-261深鉢（第23図1）が出土している。

3. まとめ

発見された遺構は、材木列5条、掘立柱建物跡5棟、土坑3基、溝跡6条、小柱穴・ピット90などである。遺構の重複と配置から大別して3時期の遺構の変遷が考えられる。

1. 宮衙造営以前の遺構群 S D1367・S D1372



2. I期官衙の遺構群 A S A1380



B S A272



3. II期官衙の遺構群 A S B1390・S B1395………
B S B1370………S B1385………(S B1375)



S A1365

C S A1379



S A1378

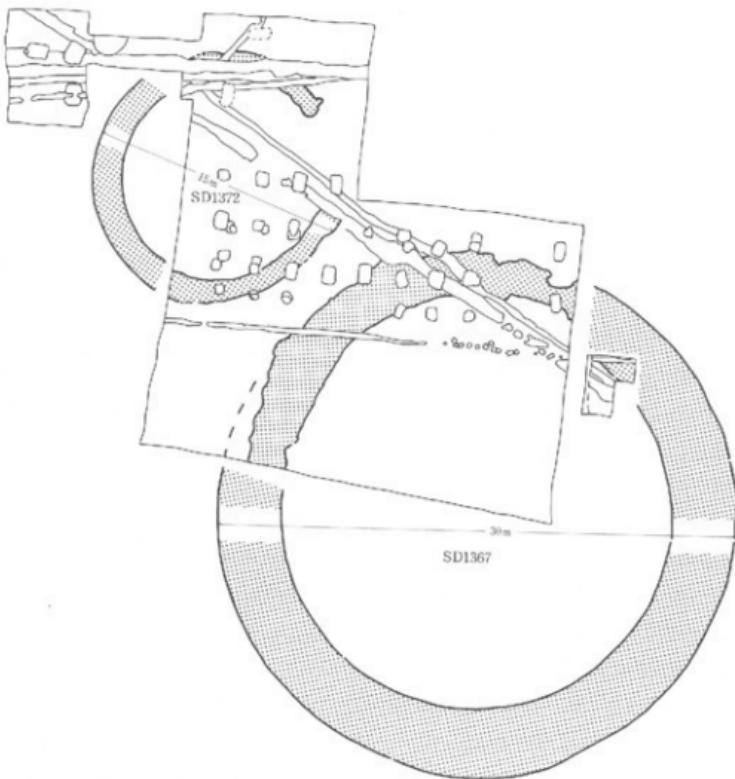


S D1364

1. 宮衙造営以前の遺構群 S D1367、S D1372溝跡

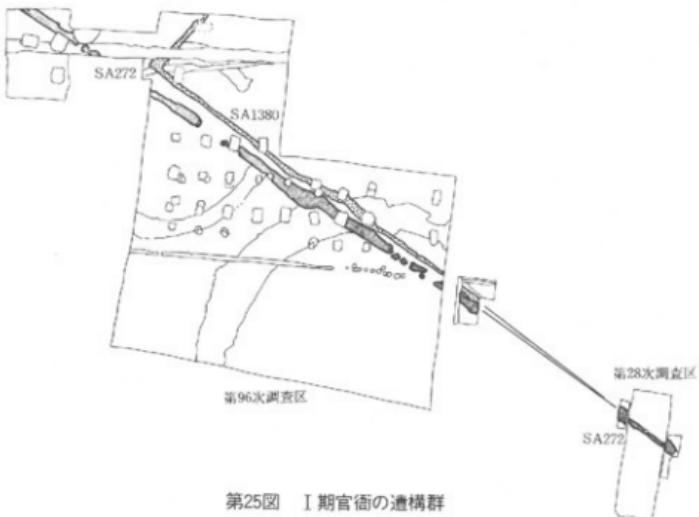
S D1367溝跡は外側で直径30m、S D1372溝跡も外側で直径15mのいずれも円形に巡る溝跡である。形態から古墳の周辺の可能性もあるが、埴丘の積み土や石室に使用された河原石などが検出されなかったため、古墳とは断定しなかった。これらの溝跡については自然堆積の後に人为的に大量の土が入れられた形跡があり、I期官衙造営時に埋め戻された可能性がある。

S D1367溝跡から出土した遺物については、土師器C-717坏が小型の内面黒色処理された丸底の坏で、このような特徴をもつ土師器坏は早くは7世紀前半とされる宮城県清水遺跡第IV群土器（註1）に見られ、本遺跡でもII期官衙外郭材木列下層のS K47土坑（註2）、II期官衙外郭大溝（註3）などから出土した土師器坏類の中に類似するものがある。また8世紀代にも同様の特徴をもつ土師器が存在する。したがって7世紀前半代に出現し、比較的長期間にわたって存在した器形の坏と考えられる。土師器C-718は口縁部や胴部の形態から、東北地方南半における土師器型式編年の第V型式（環唇式）の壺に類似する（註4）ものであり、7世紀前半代から中ばにかけての土器と考えられる。



第24図 官衙造営以前の遺構群

須恵器E-361平瓶については、口縁部の形態や天井部が平坦であるという点では、7世紀の中、後葉を中心とした時期とされる清水遺跡第V群土器（註5）の平瓶に類似する要素が見い出せる。また、沈線の間に櫛状工具による刺突が巡る文様については、宮城県色麻町色麻古墳群（註6）の中で最も古い時期とされる第1段階（7世紀中葉～後葉）の204、205号墳出土の長頸瓶の体部文様などに類似している。さらに愛知県猿投窯跡群出土の平瓶と比較すると、底部の形態が平底である点にやや新しい要素は認められるものの、胴が小さく口縁が大きいということや刺突が巡るという特徴から、岩崎17号窯跡の時期に位置付けられるという（註7）。したがって須恵器E-361平瓶には7世紀第3四半期頃に位置づけることが妥当と考えられる。



第25図 I期官衙の遺構群

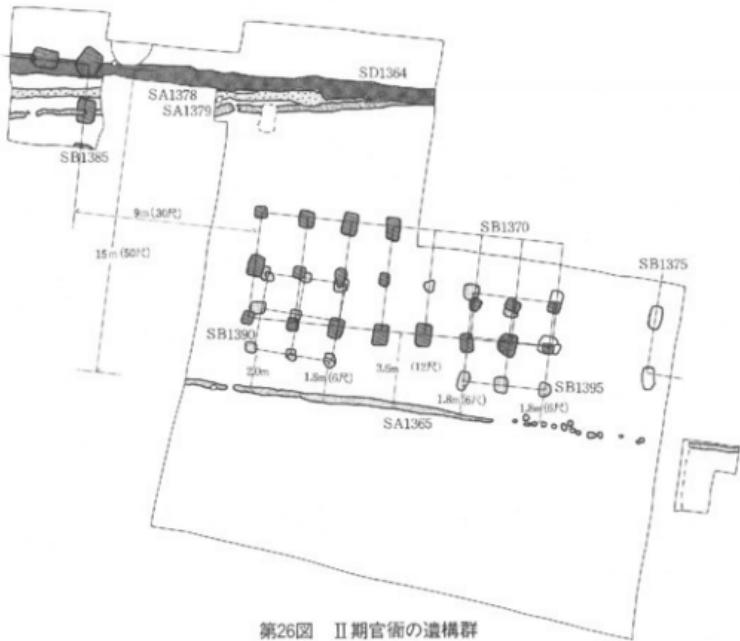
以上により S D1367溝跡の埋め戻した土から出土した遺物には、7世紀前半から後半にかけての年代観を与えることができ、須恵器平瓶の年代を重視すれば、埋め戻された時期は7世紀第3四半期頃と考えられる。

2. I期官衙の遺構群 S A1380、S A272

S A1380からS A272への2小期の変遷がある。S A272はさらに西へ延びており、SA272の時期になって官衙が西方に拡大したと考えられる。いずれの時期も材木列の南にはI期官衙に関連した遺構は検出されず、調査区のさらに南は旧河道上となるため、官衙に関連する遺構は存在しないと考えられる（註8）。したがってS A272、S A1380材木列がI期官衙の存続したある時期の南限となっていたと考えられる。なお近接する第28次調査区で材木列が1条しか検出されなかったことについては、第25図のように2条の材木列に微妙な角度のずれがあるため、東に寄るほど接近し、第28次調査区の地点で両者が完全に重視していたためと考えられる。これについては第28次調査区より東方の第13次調査区で2条の材木列を検出しているため「VI総括」の中でさらに検討する。

3. II期官衙の遺構群 S B1390、S B1395、S B1370、S B1375、S B1385建物跡 S A1365、S A1379、S A1378材木列、S D1364溝跡

遺構で重複のあるものはS B1390、S B1395とS B1370、S B1385とS A1378、S A1379、S D1364である。S A1365は重複関係はないがS B1390、S B1395の南柱列とほぼ1.8m(6尺)



第26図 II期官衙の遺構群

離れて平行しており、同時期に存在していたものと推定される。またSB1370はSB1390とSB1395を切っているが、SA1365とは3.6m(12尺)という距離で平行関係にあることから、SA1365はSB1370の時期にも存続していたものと見ておきたい。したがってSA1365、SB1390、SB1395によるA期と、SA1365とSB1370のB期が考えられる。さらにB期については、SB1370の西柱列よりSB1385の東柱列までが9m(30尺)で、SA1365からSB1385の北柱列までが15m(50尺)となっている配置関係より、SB1385もB期に含められる可能性がある。

B期以降はSB1385を切るSA1378、SA1379、SD1364などである。各々重複がありさらに3時期に細分されるが、ここでは一括してC期としておく。C期にはSA1378、SA1379、SD1364の南には新たな建物等が建てられないことや、これまであったB期の建物を壊していることから、II期官衙のこの場における機能が北へ移り、調査区の北側において新たな建物等が変遷している可能性がある。SA1379以降の材木列や溝跡はそれらの変遷に伴う遺構と考えられる。

V 第97次発掘調査

1. 調査経過

第97次調査は、仙台市青葉区国分町三丁目7-1 仙台市道路管理者仙台市長石井亨氏より、太白区郡山五丁目地内の道路工事のため平成4年9月17日付で発掘届が提出された。工事予定地の中央でII期官衙外郭南辺の材木列と大溝が横断するため、材木列については上部の工法を一部変更して遺構が損なわれないように協議した。平成4年10月から工事が開始され、道路と水田との法面に幅150cm、深さ70cmの布掘りを76mに渡って掘削し、擁壁を設置するもので、その際に布掘りの平、断面で遺構を確認した。

2. 発見遺構・出土遺物

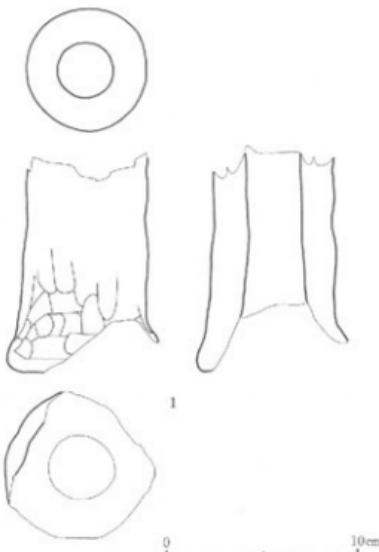
今回の調査によって発見された遺構は、II期官衙外郭南辺となる材木列1条と溝跡1条であった。これまでの調査から推定された位置において検出されている。

S A33材木列、第4、7~9、42、43、56、74次調査で検出された材木列と同一のものである。掘り方120cm程度で真東西方向に延びている。掘り方上面を検出したのみで遺構の保存を計った。

S D35溝跡 第4、7~9、42、43次調査で検出された溝跡と同一のものである。幅360cm、深さ50cm以上で真東西方向に延びている。堆積土は2層で、灰白色火山灰を含む上層よりP-26羽口片(第28図)、G-65平瓦片が出土している。



第27図 第97次調査区位置図



測量番号	基点番号	標高	出土地点	外側距離	内側距離	等級
			30E5 溝跡			
1	P-16	羽 13	92.05 S D35	1 ナメ	面頭	16-5

第28図 S D35溝跡出土遺物

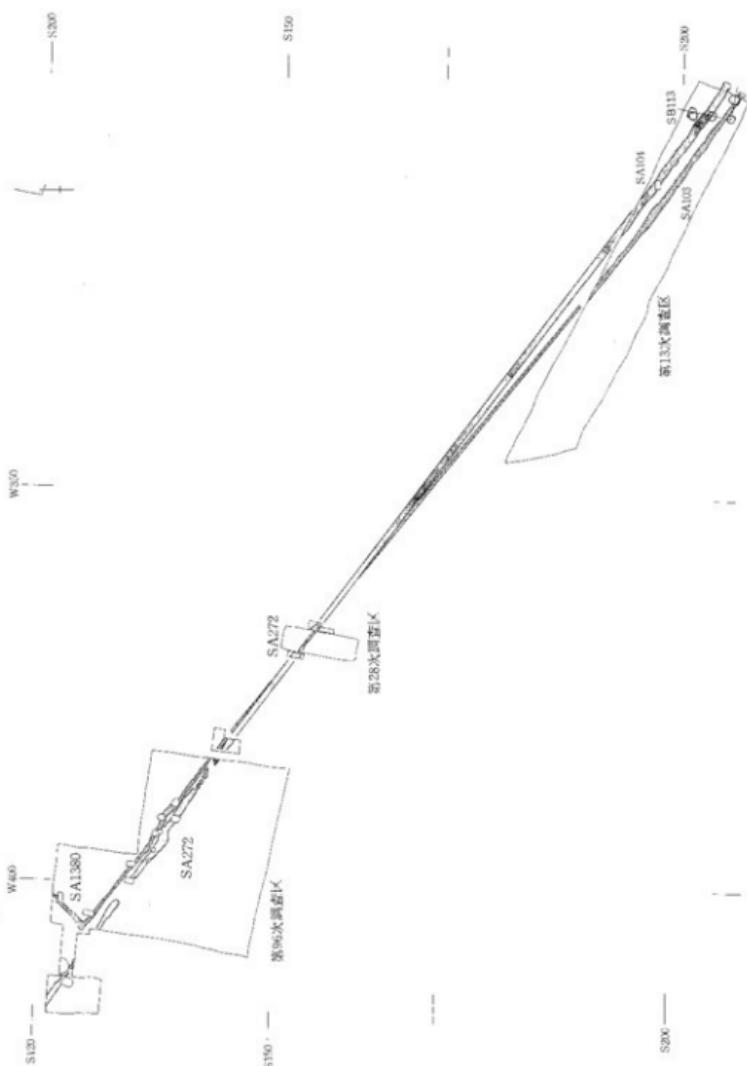
VI 総 括

今年度は第3次5ヶ年計画の3年次にあたり、当初II期官衙南東部の調査を実施する予定であったが、仙台市の推める再開発事業の範囲がI期官衙南西部に及ぶため、早急に遺跡の内容を把握する必要があり、調査地区を変更して発掘調査を実施した。その他に住宅建築、道路工事等に伴う発掘届が提出され、II期官衙外郭北辺地区、同南辺地区での小規模な事前調査を2件実施した。第95次調査は、個人住宅建築に伴うもので、盛土が厚く住宅基礎が遺構検出面までは及ばないことが確認されたことから、調査は建物建築部分を外して行った。その結果、II期官衙外郭北辺大溝の一部を検出した。第96次調査はI期官衙南西地区の様相を明らかにするため実施した結果、官衙造営以前の遺構、I期官衙、II期官衙の遺構を検出した。第97次調査は道路工事に伴うもので、道路敷内での調査であったことや遺構保存のため設計変更を行ったことから、道路工事と並行して調査し、II期官衙外郭南辺の大溝と材木列を検出した。

1. I期官衙の調査

I期官衙を構成する遺構は第96次調査において発見されている。

調査区内で2条の材木列が検出され、S A272は調査区外の西方にさらに延びている。S A272材木列より古いS A1380材木列は、調査区内で北へL字に曲がっている。調査区の東へ隣接する第28次調査では、S A1380とS A272の重複によりS A272のみ検出されたと考えられる。さらに東方の第13次調査区では完全に重複していた材木列が、角度のずれから間隔が離ればじめ、第29回のように検出されたものと考えられる。想定された配置関係や、S A272とS A1380の規模、形態からS A272がS A104、S A1380がS A103に対応するものと考えられる。ただし第13次調査ではII期官衙方向のS B113建物跡との重複が、S A103→S B113→S A104となっており、I期官衙方向の材木列→II期官衙方向の建物→I期官衙方向の材木列となっていた。これについては、その後の調査によるI期官衙、II期官衙のあり方からは考え難く、第13次調査での遺構検出状況が悪く、重複状況の把握が適切でなかったのではないかと考えられる。また第13次調査では材木列の布掘り上面で材木痕跡が検出されなかつたが、今回の調査では明らかに検出されている。これまで調査されたI期官衙の材木列のうち、第48次調査のS A577、S A578材木列は抜き取られており、とりわけS A578材木列は西壁に乱れがあり、西側から抜き取られたと見られている。したがって第13次調査のS A104の断面を観察する限り抜き取りをうけ、そのために布掘り上面まで材木痕跡が立ち上がっていなかったのではないかと考えられる(註9)。S A272、S A1380の上面で材木痕跡が検出されたことについては、第13次調査の遺構検出面の標高が8.5m前後であるのに対し、第96次調査では畑の搅乱による削平が著しく、遺構検出面の標高



第29図 第96次・第28次・第13次調査区材木列概念図

が8.2m前後と低くなってしまい、抜き取りの部分が削平されたためと推測される。

第13次、第28次、第96次調査の検討から、2列の材木列はS A272 (S A104) が全長145m以上、S A1380 (S A103) が全長135mに渡って延びていることが明らかとなった。さらに東方のII期官衙付属寺院である郡山廃寺の中核部分での第12次、第63次調査区では材木列が検出されていないことから、郡山廃寺の中核部分までは延びてないようである。

今回検出した2条の材木列は構築に際したS D1367、S D1372溝跡を人為的に埋め戻している。溝跡出土の遺物はその際に入ったものと見られる。埋め戻された年代は、これまでI期官衙の遺構を多数検出している北方の第24次、第35次調査の遺構の上限年代（註10）よりは、やや降ることが考えられる。これはI期官衙の材木列や、板塀などによる区画が官衙院や倉庫院など機能に応じて連続するような構造となっているため、最も南端と見られる区画の造営が北方の中心部分に比べやや遅れたことを暗示するのではないかと見られる。今回の調査のみで結論づけることは難しいが、材木列による区画の拡がりと区内の建物構造や出土遺物などによる機能、年代を検討することによって、I期官衙全体の様相が明らかにされるものと考えられる。

2. II期官衙の調査

第95次調査と第97次調査では想定された位置から、方四町II期官衙北辺の一部と南辺を検出している。

第96次調査ではA、Bの2小期にわたって、建物跡が5棟検出されている。このうち2棟は純柱建物跡で、これまでのII期官衙の調査でこのような建物跡が検出されているのは、方四町II期官衙の南東部において1棟（註11）だけである。方四町II期官衙の外側にあって純柱建物跡が複数存在し、材木列に区画されていると考えられることは、II期官衙のあり方を検討する上で新たな課題を提示している。

これまで方四町II官衙の南側において、第65次調査（註12）、第85次調査（註13）などでII期官衙方向の大型の建物跡が発見されている。第65次調査のN、O区では2間×10間の建物跡が3棟検出され、そのうち2棟（S B1306、S B1320）は並立して建っていたと考えられる。このような桁行の長い建物は、福井県三井郡小郡遺跡、岡山県久米郡宮尾遺跡（註14）、などで発見され、多くは郡衙の中核部分に建てられるものである。また第85次調査では、II期官衙の政厅正殿（S B1350）とほぼ同規模の四面廻建物（S B1277）が発見されている。これらの建物の機能、性格については、今のところ明らかとなっていない。また方四町II期官衙成立時に同時に建てられたのか、成立後に関連施設として追加して建てられたのか、あるいは成立前に前身的施設として建てられたのかなどが考えられる。しかし今回の調査を含め、これらの遺構からは出土遺物が少なく、II期官衙期における遺構変遷の詳細を把握するまでには至っていない。



第30図 I期官衙・II期官衙構造配置図

さらにこれまで方四町II期宮衙外での調査が、計画的かつ広範囲に実施されていないため、建物の配置関係などの全体の様相についても明らかになっていない。これら方四町II期宮衙外の遺構については、調査成果の蓄積を待って検討したい。

参考文献

度々、引用される郡山遺跡概報については次のとおりである。

- 「郡山報1」 仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」「郡山遺跡発掘調査概報」1980
「郡山I」 仙台市文化財調査報告書第29集「郡山遺跡I」1981.3
「郡山II」 仙台市文化財調査報告書第38集「郡山遺跡II」1982.3
「郡山報2」 仙台市文化財調査報告書第42集「郡山遺跡－第13次」1982.3
「郡山III」 仙台市文化財調査報告書第46集「郡山遺跡III」1983.3
「郡山IV」 仙台市文化財調査報告書第64集「郡山遺跡IV」1984.3
「郡山V」 仙台市文化財調査報告書第74集「郡山遺跡V」1985.3
「郡山VI」 仙台市文化財調査報告書第86集「郡山遺跡VI」1986.3
「郡山VII」 仙台市文化財調査報告書第96集「郡山遺跡VII」1987.3
「郡山VIII」 仙台市文化財調査報告書第110集「郡山遺跡VIII」1988.3
「郡山IX」 仙台市文化財調査報告書第124集「郡山遺跡IX」1989.3
「郡山X」 仙台市文化財調査報告書第133集「郡山遺跡X」1990.3
「郡山報3」 仙台市文化財調査報告書第145集「郡山遺跡－第84・85次－」1990.6
「郡山XI」 仙台市文化財調査報告書第146集「郡山遺跡XI」1991.3

註

- 註1 宮城県文化財調査報告書第77集 東北新幹線関係遺跡調査報告書－V－ 1981 (1)清水遺跡 第IV群土器 P315～P324
- 註2 「郡山I」 第4次調査 P18～P21 P28 17図の1
- 註3 「郡山V」 第44次調査 P31 第13図の10 12 13
- 註4 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」第14輯 P1～14東北史学会仙台市文化財調査報告書第43集 粟遺跡 第12号住居跡出土遺物 P57～P66
- 註5 註1と同じ 第V群土器 P324～P337
- 註6 宮城県文化財調査報告書第103集 色麻町香ノ木遺跡 色麻古墳群 1984
- 註7 須恵器平瓶の年代観については、文化庁美術工芸課文化財調査官、齊藤孝正氏より貴重な御教示をいただきいた。記して感謝したい。
- 註8 仙台市文化財報告書第162集 仙台平野の遺跡群Ⅹ 同第170集 仙台平野の遺跡群Ⅺ により郡山遺跡の隣接地である長町貨物ヤード跡地の調査で、掘立柱建物跡や竪穴住跡などの遺構は旧河道上からは発見されていない。
- 註9 「郡山報2」 第13次調査 図版11
- 註10 「郡山V」 XI 5ヶ年調査の総括 P85 86 「郡山X」 V第2次5ヶ年調査の総括 第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料 1991.2
- 註11 「郡山報1」 2号A・B建物跡、本報告書の第30図中に図示した。
- 註12 仙台市文化財報告書第101集 郡山遺跡－第65次調査報告書－ 1992 第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料 1991.2
2間×10間の建物跡の他に、調査区の南端において小規模な四面廻建物を中心に建物跡が3時期の変遷をしている。(寺院東方建物群)
- 註13 「郡山報3」 第85次調査
- 註14 山中敏史・佐藤興治「古代の役所」－古代日本を発掘する5－ 岩波書店 1985

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

月 日	行 事 名 称	担当職員	主 催
4. 9. 4	講座「古代の暮らしを知る」第1回	木 村	中田市民センター
9.11	〃 第2回	〃	〃
9.18	〃 第3回	〃	〃
10.19	南光台東小学校 5年生 インリーダー研修会	木村・長島	南光台東小学校 子供会育成会
10.23	講座「地域文化考」	木 村	八本松市民センター
10.29	郡山中学校 1年生見学会	長島・稲葉	郡山中学校
11.22	講座「地域文化考」	木 村	八本松市民センター
12. 3	第96次調査報道発表	加藤他	
12. 5	〃 現地説明会	〃	
12.12	宮城県内発掘調査成果発表会	長島・稲葉	
5. 1.20	宮城県高清水町文化財保護委員会視察	長 島	
3.20・21	第19回古代城柵官衙遺跡検討会	長島・稲葉	

仙台市博物館 常設展「原始・古代・中世」

八本松市民センター 「郡山遺跡資料展示」

栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 企画展「古代の役所」

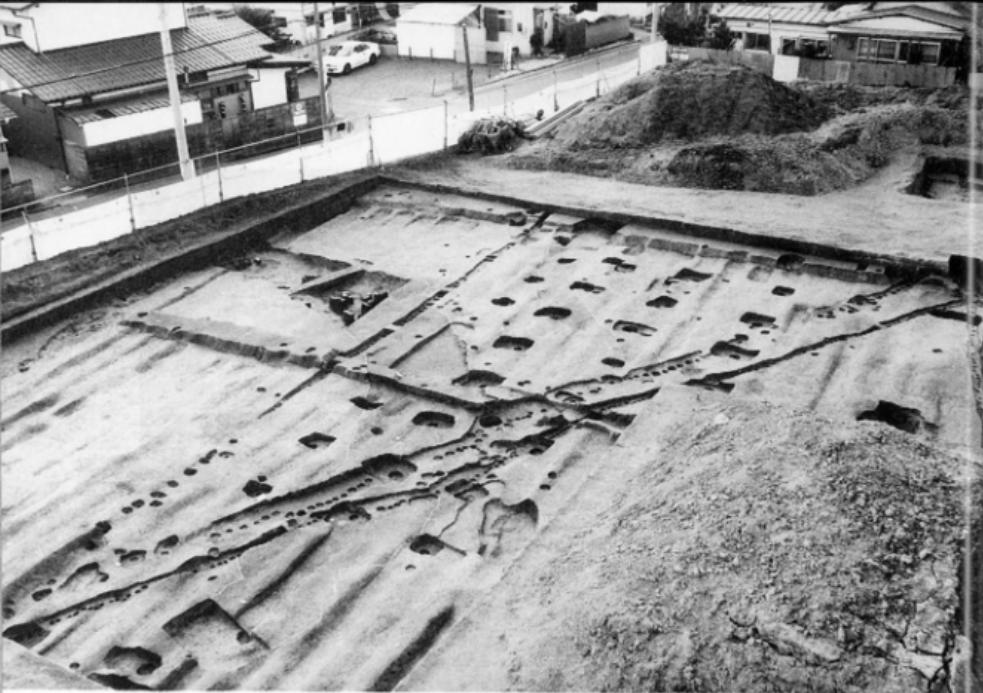
2. 調査指導委員会の開催

- 第21回 郡山遺跡調査指導委員会 3月17日 北庁舎4F第1会議室
- 平成4年度の事業報告について
 - 平成5年度の調査計画について

写 真 図 版



図版 1 郡山遺跡航空写真

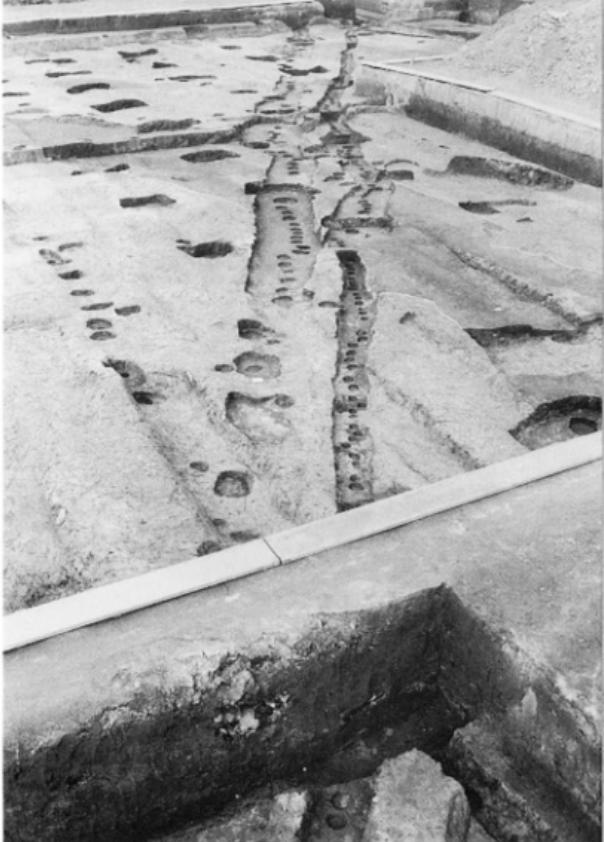


図版2
第96次調査区
南半全景（東より）



図版3 第96次調査区北半全景（東より）

図版 4
S A272、S A1380
材木列全景（東より）



図版 5
S A272、S A1380
材木列全景（西より）



図版 6
C区 S A272、S A1380
S A1365全景（南より）



図版 7
S B1370、S B1390
S B1395全景
(南より)

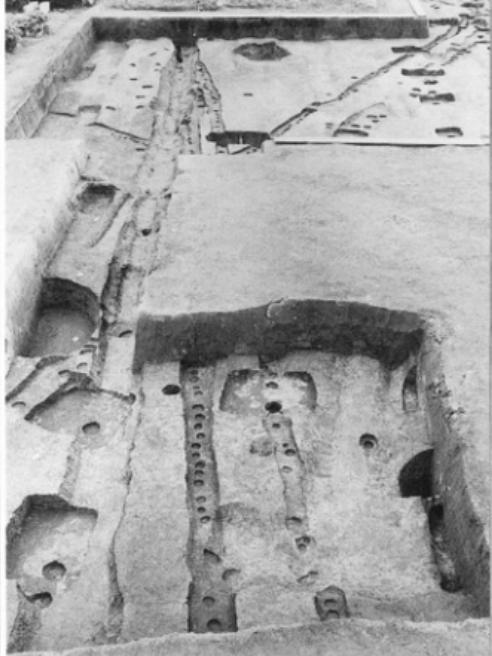


図版 8
S B1370、S B1390
S B1395全景
(西より)





図版9 SB1375全景（南より）



図版10 SA1378、SA1379、SD1364
全景（西より）



図版11 D区SB1385、SA1378、SA1379
全景（南より）



図版12 S D1367遺物出土状況（1）
C-717 壺（西より）

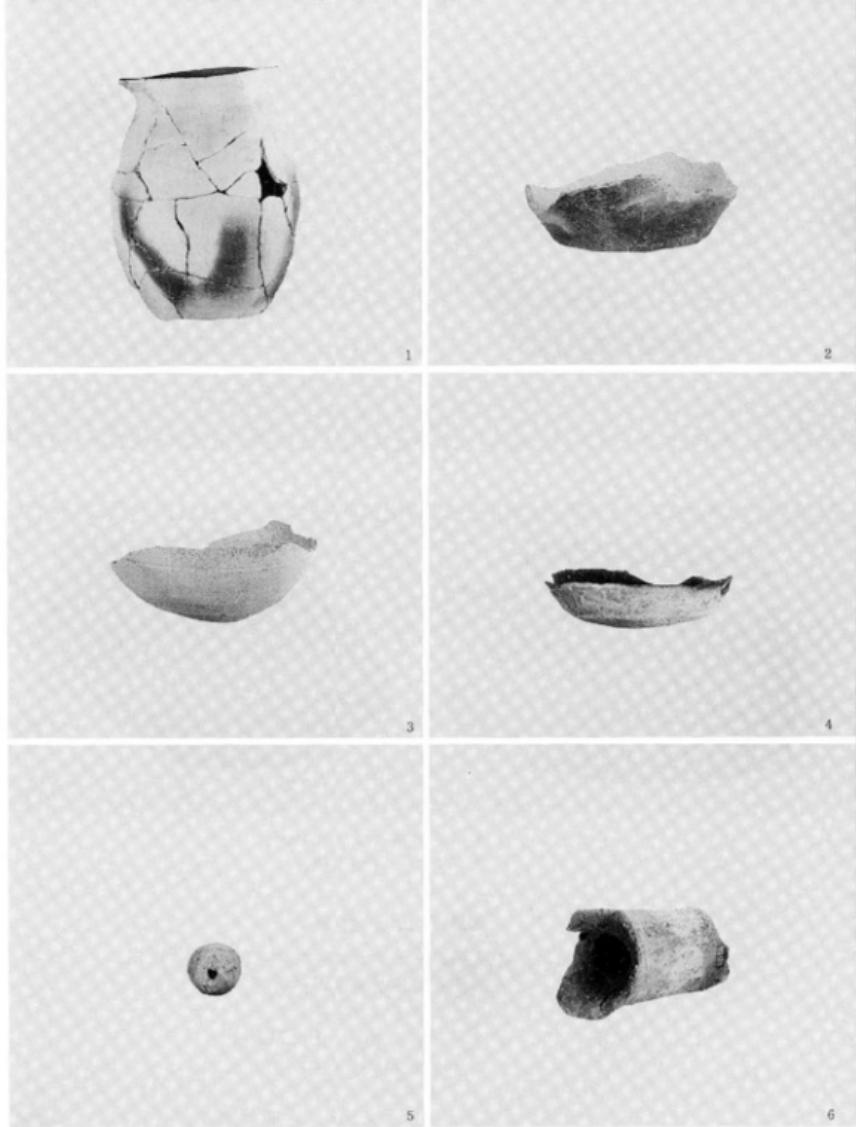
図版13 S D1367遺物出土状況（2）（西より）



図版14
S D1367遺物出土状況（3）
C-718 壺（南西より）



図版15
S D1367遺物出土状況（4）
(南より)

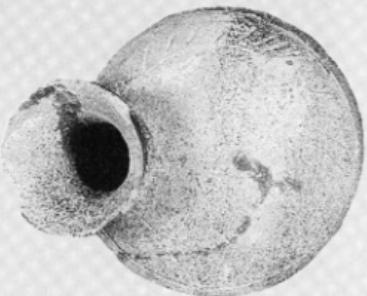


1. C-718 壺 96次 (A区南號)
 2. B-261 鍤 96次 (B層)
 3. E-351 瓦 96次 (SD1367)
 4. C-717 坑 96次 (SD1367)
 5. P-25 土鍤 96次 (SD1364)
 6. P-26 羽口 97次 (SD35)

圖版16 出土遺物



1 a



1 b



2 a



2 b

1 E-361 平瓶 96次 (SD1367)

2 E-349 盆 96次 (搅乱)

図版17 出土遺物

仙台市文化財調査報告書第169集

平成4年度

郡山遺跡 XIII

—平成4年度発掘調査概報—

平成5年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区塙分町3-7-1

印刷 株東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

